様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　6 月　25 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2009～2011
課題番号：21730432
研究課題名（和文）心理主義化と再帰的主体の生成

研究課題名（英文）Social Control through Psychological Knowledge and Modern Self

研究代表者
崎山　治男（SAKIYAMA HARUO）
立命館大学･産業社会学部･准教授
研究者番号：20361553

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代社会におけるセラピーやカウンセリングに代表される心理主義的な知が､個々人の自己形成､ひいては社会統制に与える影響を分析したものである。
その主要な成果としては、特に 2000 年代に入ってから心理主義的知がマニュアル化・単純化され、それに併せた形で「人間力」といったコトバに現されるように、自己実現・自己達成へと簡単に煽られる社会が形成されたことがある。

研究成果の概要（英文）：This project has studied the construction of modern self and identity through psychological knowledge. It has shown that psychological knowledge has been simple, and has become the “power” of self-esteem and self-attainment.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学
キーワード：心理主義化、自己、感情社会学

１．研究開始当初の背景

感情社会学においていわゆる感情労働研究が進展し、その職種や対象が広がりを見せる中で、従来のように必ずしも、いわゆる自己疎外モデルでは通用しない事象が見られるようになった。

具体的には、人と接する仕事に「やりがい」という承認欲求を求める心性の増加があげられる。

それは、たとえば就職時における自己分析が重視されたり、労働場面での自己実現と過剰なる労働への包摂といった事柄に見られる。そこでは、しばしば労働と私的生活との逆転現象という現象がアメリカ合衆国をはじめとする先進国において指摘され、過剰労働・自己実現の集中と二極分化の進行が懸念されている。

また逆に、私的生活における「自分磨き」といった現象も一層進行している。たとえば、恋愛、結婚、家事育児におけるさまざまな生の技法のマニュアル化や、自己啓発に関連する書物の流行、さらには人生相談の心理学化といった事柄にみられるように、心理学的知を通して自己をよりよく見つめ直して、私的生活を充実する欲求の増大がある。

こうした心理主義へと自閉していくかの

ように見える心性がいかなる自己の形成につながるのか、そして人間関係を形成しつつ「社会的なるもの」を形成しているのかが問われる学問的・時代的背景があった。

２．研究の目的

１.に記したような心性、並びに自己・関係・社会が形成されていく際に働く心理学的な知の構成作用を知ることが目的である。そのことを通して、いわゆる権力－知の構成作用がどのように働くのかを分析する。

具体的には心理学的な知の特性を分析９する。その第一のものは通俗化と拡散である。心理学史の研究にみられるように、西欧諸国における心理主義的な知は、「聖なるもの」の世俗化と戦時技術の民間応用といった形で「開発」・「生産」された。日本においても同様に、明治期以降、主として殖産興業のテクノロジーとして導入され、それがさまざまな領域に応用され今日に至っている。

その端的な表れが 1990 年代から見られたニューエイジの思想の流行や、ライフ・ヒストリーにおける心理学的な知の急速な普及である。これらは象徴的には 1995 年時の阪神淡路大震災における「心のケア」の提唱やスクール・カウンセラーの増派、90 年代以降の看取りの心理主義化にみられるであろう。

第二には、自己へと再帰的に働くことである。知識社会学の知見に見られるように、心理学的な知は、それがあたかも真なる審級として映るために、現実を構成する絶対的な知として作用する傾向がある。

たとえば、上述した社会意識におけるニューエイジの思想の流布による厭世観、「心のケア」の提唱、看取りにおける「心」への意識の集中といった事柄は、それ自体として、権力－知として作用する。

つまり、厭世観の流布による「生」の思想の抹消、「心のケア」の流布による、「物理的」なそれへの配慮の欠落、看取りの場の医療・心理への過剰包摂が進行した後の「社会的なるもの」の痕跡を探すことが目的となる。

第三には、自己評価に対する影響力の大きさがある。具体的には、個々人の「心」が評価されるからこそ、個々人のライフ・コース全般ひいては社会生活に至るまで、自己のありさまを分析することへと人々があおり立てられていくありさまを分析する。

これらの観点から、心理主義的な知の貫徹が現代社会の自己統治と社会的なるものの衰退に及ぼす影響を考察するとともに、分断された人々が、自己・関係・社会へとあおられていくありさまを分析することを目指す。

３．研究の方法

心理主義化に関わる言説分析と、実践と抵抗を探る質的調査からなる。

前者に関しては、諸外国の研究も探りつつ、日本における臨床心理学の導入から現在に至る学問的言説の形成を探る。具体的には、臨床心理学が誕生した 19 世紀から現代に至るまで、心理学的な知が産出されつつ戦時技術として発展し、民間転用された足跡を描きだす。

同時に、その現代的展開の１つとして、1970 年代以降、ジェンダー、階層によって異なることが予測されうる雑誌の記事分析を行う。具体的には、ビジネス誌（日経ビジネス、日経ウーマン）、ファッション誌（an-an）等の雑誌記事や新聞紙上における人生相談の対象や内容が社会から個人、そして心理へと換言されていった足跡を描き出す。

同時に、いわゆる自己啓発ブームが現れた 1990 年代から現在にいたるまで、ビジネス等での自己啓発書の収集を行い、どのような形で人々が＜善き＞心へと煽られていったのかを明らかにする。

そして 2000 年代から急速に「心」をめぐる語彙が画一化され、心をめぐる言説が貧困化する一方で、手厚い「心」への支援が強調される逆説的な関係性を描き出す。

後者については、前課題に引き続き、緩和ケアにおける実践の中から、心理学的な知に影響される関係とされない関係性との境界線を探る。

具体的には、当該期間の一部（2009 年度前半）に行った英国（サリー大学）での在外研究の成果を生かしつつ、ホスピス・緩和ケアのあり方を分析する。

そこでは、日英の文化の違いを前提としつつも、看取りの場のパッケージ化と医療化に伴う個人化の進展を主として分析することを目指す。それと同時に、それにあらがって特に緩和ケアが急速に「医療」のものになりつつある時勢に抗して地域社会との連携や解放がなされうる場と、相互行為の技法について、日本において最初期に仏教ホスピスが成り立った際の思想・運動に定位しつつ分析することを目指す。

４．研究成果

この期間中での成果については、５の発表論文等を参照されたい。それらは上記の目的、方法に即して３つのものに大別される。

第一には、心理主義の進展による「心」をめぐる言説の貧困化と「善き」感情労働へと就職・労働の場面であおり立てられるありさまを分析した理論的な言説分析である。

具体的には、感情をめぐる語彙が個人化、用具化されるありさまを描き出したものとして崎山 2011 がある。そしてそれが、看護・介護といった場面で現象し、「善き」感情労働を行っていく心性と、他方で労働をそれとして割り切り、それ以外のネットワークでの

交流に快楽を見いだしていくありさまを分析したものとして崎山2010a,崎山2009fがある。

第二には、主として英国に端を発するホスピス、緩和ケアの思想的源流を追いながらそれが文化が異なる日本社会において定着していったプロセスを社会哲学のあり方から研究しつつ、かつ緩和ケアの場に定位した質的調査群をまとめたものがある。

これらは、私の他、出口剛司氏と共同して取り組まれた一連の研究発表、論考として成果をこの期間発信し続けてきた。

その比較思想・文化的な成果発信としては崎山 2009b～2009ｄとして、国際学会で発表され、高い評価を得た。

またさらに、宗教者・医療者が紡ぎ出す実践の社会運動的背景を踏まえつつ、相互行為における看取りの技法を描き出したものとしては崎山2012a,崎山2009aがある。

第三には、私がこれまで取り組んできた感情社会学や、それを踏まえた社会調査、さらに学内外の連携機関での活動を踏まえた実践的提言を集めた論考がある。具体的には、崎山2012bにおいて、質的調査、特に障老病異に関わる人々への調査における「巻き込まれ」の危険をオーバーラポールという概念に引きつけて考察した。また、崎山2010bにおいて、主として医療・福祉の実践を目指す諸学者向けに感情社会学の概要を、感情労働という概念と、心理主義化と社会統制との関連から論じた。

本課題に継続して採択された科研費・若手研究Ｂ「心理主義化と参加型社会の形成」(平成24年度～27年度、代表崎山治男）の助成をうけながら、本課題での成果をより広く、心理主義的な知による社会形成と統治の考察を進める。

具体的には、まず本課題の研究成果の到達地点を踏まえた言説分析と質的調査の深化を目指す。

まず言説分析については、特に「心」へのケアが重点的に叫ばれはじめ、それが一定の社会形成の地点にたどり着いた地点として、1995 年の阪神淡路大震災・オウム事件から2011年までの「心」のケアに関わる、主として社会学・心理学における学的な知のあり方を集中的に再検討する。

それを通して、この間「参加型動員社会」とよばれる現代社会が、どのような知を元に形成されてきたのか、その系譜を探ると同時に、人々を「やりがい」や「自己実現」へと自発的に駆り立てることを通して、さまざまな「問題」を個人化・心理化しつつ、社会統治がなされてきたありさまを考察することを目指す。

さらに、質的調査については、いわゆる「引きこもり」とされる人々やそれを支援する支援者について、関西圏における調査に着手する。

その際の具体的な考察点は、言説分析と連動しつつ、この間の参加型社会の形成が、他方では「人間力」、「生きる力」といった形で過度に個々人のコミュニケーション能力へと依存することで形成されてきたということに着眼しつつ、「人間力」の強調による社会からの「撤退」のあり方として「引きこもり」の人々の多様な生のあり方を描き出すことを目指す。

これらの目標の中間地点として、平成 25 年度中に単著として著書を刊行しつつ、かつ日本社会学会との連携のもと、ISA（国際社会学会）横浜大会での感情社会学での企画を開催することを模索する。

また同時に、上記のプロジェクトを、立命館大学産業社会学部、立命館大学生存学研究センターをはじめとする学内外で連携している機関や研究チームとともに深めていく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４　件）
①崎山治男、2012、「仏教ホスピスにおける相互行為の技法」、『立命館大学産業社会論集』、47－4、査読有、pp.69-80
②崎山治男、2012、「社会と感情が交錯する地点に向けて」、『生存学』、5 号、査読有、pp.206-216
③崎山治男、2011、「心」を求める社会」、『社会学評論』、61－4、査読有、pp.440-454
④Haruo Sakiyama 、2010、 When Emotional Labour becomes to ‘good’ The usage of emotional intelligence ” International Journal of Work, Organization and Emotion(3巻2号）、査読有、pp.174-185

〔学会発表〕（計４　件）
①崎山治男、2009、「仏教ホスピスの可能性と限界」日本社会学会第 81 回大会、於・立教大学(東京都)、10月11日
②Haruo Sakiyama et.al 、2009、“ An Experience of Buddhism based Palliative Care3:Reconsidering the Social Consciousness of Religio”
European Association of Palliative Care、第11回大会、5月9日、ウィーン市(オーストリア)
③ Haruo Sakiyama et.al 、 2009 、“ An experience of Buddhism based palliative care 2：How Buddhism priest see their Role in CPU? ” European Association of Palliative Care、第11回大会、5月8日、ウィーン市(オーストリア)

④Haruo Sakiyama et.al、2009、“An experience of Buddhism based palliative care 1:How nurses see the role of Bonze at Vihara Unit?”European Association of Palliative Care、第11回大会、5月8日、ウィーン市(オーストリア)

［図書］（計３件）
① 崎山治男、2010、「感情を社会学的に考える」、早坂裕子、広井良典、天田城介編、『社会学のつばさ』、ミネルヴァ書房、pp.187-202
② 崎山治男、2009、「社会問題の理解」、友枝敏雄編『新社会福祉士養成講座』、中央法規、pp.12-24
③ 崎山治男、2009、「感情の用法：感情による用法」、立命館大学GCOE創成拠点＜生存学＞研究センター編、『ケアと感情労働―異なる学知の交流から考える』、pp.145-163

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者：崎山治男
崎山　治男（HARUO SAKIYAMA）
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：20361553

【注釈】
・2012a･･･崎山治男「仏教ホスピスにおける相互行為の技法」『立命館大学産業社会論集』47－4,pp.69-80
・2012b　崎山治男「社会と感情が交錯する地点に向けて」『生存学』5号,pp.206-216
・2010a･･･Haruo Sakiyama When Emotional Labour becomes to ‘good’ The usage of emotional intelligence ”International Journal of Work, Organization and Emotion(3巻2号),pp.174-185,
・2010b･･･崎山治男「感情を社会学的に考える」早坂裕子、広井良典、天田城介編『社会学のつばさ』ミネルヴァ書房,pp.187-202
・2009a･･･崎山治男「仏教ホスピスの可能性と限界」日本社会学会第81回大会、於・立教大学(東京都)、10月11日
・2009b･･･Haruo Sakiyama et.al “An Experience of Buddhism based Palliative Care3:Reconsidering the Social Consciousness of Religio” European Association of Palliative Care、第11回大会、5月9日、ウィーン市(オーストリア)
・2009c･･･Haruo Sakiyama et.al. “An experience of Buddhism based palliative care 2：How Buddhism priest see their Role in CPU?”European Association of Palliative Care、第11回大会、5月8日、ウィーン市(オーストリア)
・2009d･･･Haruo Sakiyama et.al “An experience of Buddhism based palliative care 1:How nurses see the role of Bonze at Vihara Unit?”European Association of Palliative Care、第11回大会、5月8日、ウィーン市(オーストリア)
・2009e･･･崎山治男「社会問題の理解」友枝敏雄編『新社会福祉士養成講座』中央法規、pp.12-24
・2009f･･･崎山治男「感情の用法：感情による用法」立命館大学GCOE創成拠点＜生存学＞研究センター編『ケアと感情労働―異なる学知の交流から考える』pp.145-163